

株式会社パルタック

ストアソリューションまでを考えて構築された統合小売り管理システム「PARS」を支えるのは、柔軟性、拡張性、そして高速処理が身上のCACHE

パルタック独自の「マーチャндаイジング」と「ロジスティックシステム」に基づく質の高いサービスは、取引先である小売業、メーカーの両者から高い評価を得ている。長年培ってきた物流や情報処理に関するノウハウを基に、「どうすれば売れるか」「どんなものを作れば売れるか」といった課題に確かなソリューションを提供してきた。その中核の1つとなるものが、統合小売り管理システム「PARS」である。



常務執行役員 IT戦略室長
道端 良作氏

株式会社パルタック

〒541-0058
大阪市中央区南久宝寺町一丁目5番9号
TEL:06-6262-1286

<http://www.paltac.co.jp/>

PARSの根幹を支えるのは、 絶大な信頼を勝ち取ったCACHE

パルタック社は、100年以上の歴史をもつ、化粧品・トイレタリをはじめとする日用雑貨品卸売業のトップ企業で、取扱品目は、国内はもとより海外メーカーも含め1400社、5万品目にも上る。これらの商品を日本全国のドラッグストア、コンビニ、スーパー、ホームセンタ等の小売業者に供給している。この卸し・流通の基幹業務のすべてを管理する「SAMS」と呼ばれるネットワーク型のEDI対応総合卸しシステムを自社開発により展開し、納品精度99.999%という、非常に正確で効率的な物流を実現している。「PARS」はこのパルタック社の卸しシステム「SAMS」との連動により商品流通の全てを一元管理する目的で、チェーンストア向けに開発された統合小売り管理システムで、受発注、検品・返品を含む在庫管理、売上管理から、店舗での棚割り、プライスカード出力、POP作りまで、小売業のほぼ全業務を担うものである。

「PARS」の開発の始まりは、今から10年ほど前の1995年で、ちょうど、Windows95が登場し、クライアント/サーバ時代の黎明期とでもいえるときである。このとき開発された初代「PARS」は、DBを本社に置き、店舗にはdBaseというDOS時代一世を風靡したDBMSが使われていた。3年後、本部システムをCACHE、ODBC接続版に変更し、店舗システムはVBで開発したシス

テムへとバージョンアップを行っている。「PARS」をスタート当初から担当されている株式会社パルタック常務執行役員 IT戦略室長道端良作氏は、当時を振り返り、次のように語る。「もともと本業の卸し・物流と小売りの乗り入れを考えて作られたのがこのPARSです。顧客ニーズから発生し、当社と取引先各社がWIN-WINとなるシステムです。しかし、卸業の当社にとってのメリットは、取引先の小売業から見れば必ずしもメリットとはならないといった問題を含んでいました。ですので、当社の利益を考えたというのではなく、業界としてどうあるべきなのか、を考えながら開発を進めました」。結果として誕生した「PARS」は当時登場したばかりのSCM (Supply Chain Management) の走りともいえるアプリケーションとなったのである。初代から3年後にDBがCACHEに変更されたが、その選定の最大の要因はパフォーマンスの高さと柔軟性であったと道端氏は語る。

「DBをCACHEに変更するとき、いくつかのDBMSと比較検討を行いました。しかし、速い、データがコンパクト、アプリケーション開発がらくという3点で他の製品とは一線を画していたCACHEを導入することにしました。CACHEにしてから8年ほど経っています。定期的に他社製品と比較のベンチマークテストを行っていますが、現時点でもCACHEが一番ですね。ですから、2006年度の大規模改訂でもDBはCACHEなのです」。

最新テクノロジーを投入して 開発された最新版「PARS」

「PARS」は2006年大幅に改訂が行われた。それは、Webアプリケーションへのシフトである。これまでのシステムはFATクライアントで、システムとしては密結合となっていたが、リッチクライアントを利用して、シンプル、疎結合、プラットフォーム非依存なシステムへ変更したのである。ここで問題となるのが、開発環境をどうするのか、ということであった。マーケットとしては、VBを含む.netか、JAVAかということだが、当社が選択したのは、Curlであった。CurlはHTMLのようなページ記述と、JavaScriptのようなプログラミング機能を統合したクライアント側で処理を行うためのプログラミング言語である。

「これまでVBを利用してクライアントサイドを開発してきました。今回の開発に当たって、私自身がCurlを使ってスマートクライアントシステム

を作ってみました。同時にVBでも作ってみました。最終的には、操作性やUIといったWebブラウザでの問題や、アプリケーション配布などのクライアント/サーバ型にある問題を解決するCurlが開発となったのです。CACHEとの親和性も高く、これまでのVBからの移行も、CACHEでのロジックの書き換えは一切せず、そのまま利用しています。概念設計に多くの時間をかけることで、実際の開発自体は4ヶ月という短時間で終わることができました」(道端氏)。

リッチクライアントを利用したことで、非常に操作しやすいUI設計と、ユーザごとに表示アイテムや画面構成がカスタマイズできる柔軟性などの大きなメリットを生み出し、それが「PARS」のユーザには非常に喜ばれている。

増加する膨大なデータ処理にも 柔軟に対応、高いパフォーマンス

現時の「PARS」では、数百店舗を有するチェーンストアでもこのシステムを活用している。バージョンアップに当たって同社は、800店舗規模のテストを行っている。「一応1,000店舗までなら大きなパフォーマンス劣化を招かないという想定で開発を行いました。1店舗当たり年間5万品目。しかもそのうち平均で40%が1年で入れ替わります。そういう莫大なデータを扱っているシステムとは思えないほど高いパフォーマンスを示しています」と道端氏。毎週各店舗で8週分の商品ごとの発注オーダーキャストを算出するが、一般的なパッケージでは1時間以上かかるものが、「PARS」では、数分で終わるといふ。この高いパフォーマンスは、CACHEが持つ基本性能の高さを示すものだが、システム開発時にアクセスを最小にするようロジックを組んでいる点を見逃すことはできないだろう。



データ照会画面例

数万行の表への
貼り付けも瞬時